

不登校予防の研究（最終報告）

－居心地のよいクラスづくりをとおして－

高校教育研修課 主任指導主事 阿部 浩士
義務教育研修課 指導主事 寺戸 武志

はじめに

平成24年度の全国の小・中学校の不登校児童生徒数は112,689人であり、依然として100,000人を超えており、喫緊の教育課題となっている¹⁾。その解決に向けた学校における取組としては、「不登校未然防止」と「不登校児童生徒支援」の2つの観点が示されている²⁾。しかし、現在、学校では不登校傾向が懸念される児童生徒や不登校に陥ってしまった児童生徒に対する「不登校児童生徒支援」に係る個別指導はよく行われているが、「不登校未然防止」に向けた学級集団や学校環境への働きかけには工夫・改善の余地があると考えられる。

そこで当所では、児童生徒の人間関係づくりを重視した不登校予防プログラムを開発することを目的とし、平成24年度と平成25年度の2年間にわたり、多可町教育委員会と連携して共同研究を実施した。

本研究の1年目である平成24年度における取組は、当所の研究紀要第123号に中間報告として掲載した。そこで本報告は、2年目となる平成25年度における取組内容を中心に、2年間にわたる研究成果を総括する。

1 多可町教育委員会との共同研究の取組

(1) 研究の目的

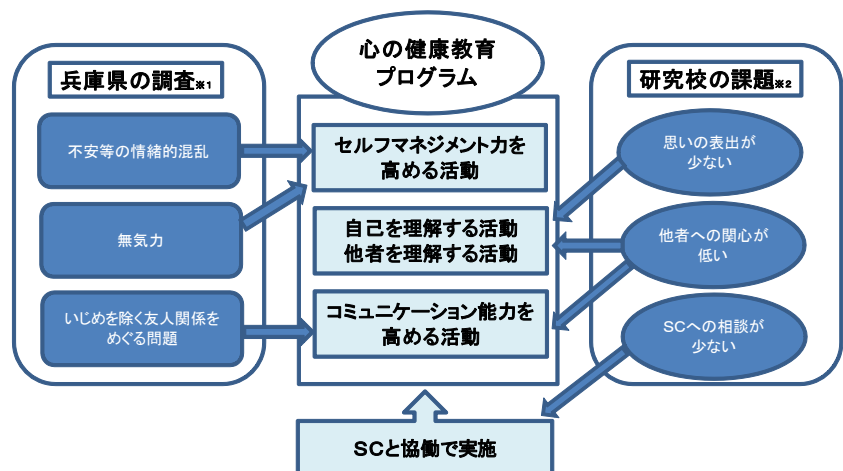
不登校を未然に防止するためには、児童生徒が安心して学べる「居心地のよいクラスづくり」が必要である。そのためには、児童生徒自身が自分の所属する集団の人間関係をよりよいものにしようとする態度を育むこととともに、児童生徒の思いや悩みをしっかりと支えられる環境を整えていくことが必要だと考える。そこで、児童生徒を育むための「授業づくり」と、児童生徒を支えるための「環境づくり」の2つの側面から有効な取組について考察し、不登校予防プログラムとしてまとめることを目的とした。本研究は、当所と多可町教育委員会による共同研究として行った。また、同町立八千代中学校を研究校として授業等を実施し、効果の検証を行い、その成果を不登校予防プログラムとして提案することとした。

(2) 研究の方法

ア 授業づくり

授業は当所の心の教育総合センターが作成した「心の健康教育プログラム」の中から不登校予防に適したものを選択し、再構成を行って作成した。よってこの授業を「不登校予防プログラム授業」とした。

「心の健康教育プログラム」は「セルフマネジメント力を高める活動」「自己を理解する活動・他者を理解する活動」「コミュニケーション能力を高め



※1兵庫県の調査…兵庫県教育委員会「平成23年度兵庫県下の公立学校児童生徒の問題行動等の状況について」、2011
※2実践校の課題…多可町立八千代中学校「学校生活サポートアンケート」（全校生徒対象に実施）、2012

図1 「不登校予防プログラム授業」の作成（概念図）

る活動」の3つのカテゴリから構成されており⁴⁾、作成に当たっては県内の中学生の実態、研究校である八千代中学校及び地域固有の課題に留意した。そこで、平成23年度の兵庫県教育委員会の調査³⁾における「中学生の不登校になったきっかけ」と、学校生活サポートアンケート及び学校や地域固有の課題に対する教職員への聞き取り調査等の結果から得た「研究校の課題」を分析したところ、「心の健康教育プログラム」の3つのカテゴリとの関係は図1のようになった。

「不安などの情緒的混乱」や「無気力」に対しては、不安による自分の心と体の変化について知り、前向きに対処できる能力を養うことが効果的であると考え。そこで「セルフマネジメント力を高める活動」の中の「ストレスマネジメントスキルの向上」の授業を選択した。「思いの表出が少ない」「他者への関心が低い」に対しては、自分や他者を理解し表現し合えるための活動が効果的であると考え。そこで「自己を理解する活動・他者を理解する活動」の中の「自己理解と他者への表現」の授業を選択した。「いじめを除く友人関係をめぐる問題」や「他者への関心が低い」に対しては、円滑なコミュニケーションによる豊かな人間関係づくりを目指したコミュニケーションスキルの向上が効果的と考え。そこで「コミュニケーション能力を高める活動」の中の「聞き方の工夫」の授業を選択した。それぞれの授業案に授業者がアレンジを加えて実施することとした（表1）。

表1 今回実施する「不登校予防プログラム授業」

- 「毎日をご機嫌に過ごすための工夫」（ストレスマネジメントスキルの向上）
- 「SPトランプを用いた他者との関係づくり」（自己理解と他者への表現）
- 「目指せ！ ほっこりクラス」（聞き方の工夫）

イ 環境づくり

上記アンケートによると、「困った時に誰にも相談しない」「我慢する」と回答する生徒が少なくなく、課題を抱えた生徒が誰にも相談できない状況に陥ってしまっていることが懸念された。そこで、不登校予防プログラムをSC（スクールカウンセラー）と協働で立案し、授業をティーム・ティーチング形式（以下「TT」という）で実施することとした（図1）。授業にSCが関わることで、生徒がSCの存在をより身近に感じることができ、気軽にSCに相談できる環境を整えることができると考える。

また、不登校支援委員会（以下、「支援委員会」という）を毎月1回実施し、不登校の状況や未然防止に向けた取組について共通理解を図るとともに、不登校生徒及び別室へ登校している生徒やその家庭に対する支援の方向性を協議し、多面的な視点での生徒理解と支援を行うこととした。

ウ 効果の検証

不登校予防プログラムの効果を測定するために、学校環境適応感尺度アセス（ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres）（以下、「アセス」という）を用いた⁵⁾。

また、教職員への聞き取り調査を実施し、授業後の生徒の感想等と併せて効果の質的な分析も行った。

2 平成24年度「不登校予防プログラム授業」の概略

(1) 実施概要

表1の3つの授業のうち「ストレスマネジメントスキルの向上」と「自己理解と他者への表現」に係る授業を選択し、平成24年度の11月と2月に、2年生を対象として表2のように実施した。

表2 平成24年度実施「不登校予防プログラム授業」

実施	授業名	ねらい	概要
11月	毎日をご機嫌に過ごすための工夫	ストレス対処について知り、よりよい対処法を身に付ける	「イライラした時」と「落ち込んだ時」の対処法をストレスマネジメントの観点から考える
2月	SPトランプを用いた他者との関係づくり	自身への気付きを深めるとともに、他者理解に努める心を育む	SPトランプを用いて自分の性格傾向を他者とともに考える

(2) 平成24年度の結果

ストレスの対処法を題材とし、まずは目に見えやすい部分である「自分自身の行動」に焦点を当てた。授業では「イライラした時」や「落ち込んだ時」にどんな対処を行っているかを出し合い、KJ法の手法を用いて班で話し合いながら対処法の分類と命名を行った。どの班も適切に分類できており、「永遠に愚痴る」「物にあたる」を「アカン系」と命名するなど、対処法には、やり過ぎたり、絶対にやってはいけないものがあるということにしっかりと気付いていた。授業後の生徒の意見には「普段、自分ではあまり考えることがないストレスについて意識を向け、改めて自分自身を振り返る機会になった」というものが多くあった。

そこで次に、目に見えにくい部分である自分の性格に注目し、さらにそれを他者と共有することによって自己理解と他者理解を深めることを目指した。授業ではSPトランプを用いて自分の性格をペアの相手とともに考えて発表し合った。当初のねらいどおり、2人組での活動をとおした活発な意見交換が行われた。自らの性格のよい部分を伝えることで会話が弾む一方、今までなかなか自己開示できなかった自分の負の部分についても話すことができて、「気持ちが軽くなった」と話している生徒もいた。また、自分自身が気付いていなかった一面を友人から指摘されることが、新たな自己理解にもつながり、自分が思っていた自分自身と友達から見た自分自身を知ることによって、改めて自分を振り返るきっかけともなった。

また、これらの授業後は、相談室を訪れる生徒数が増えており、学校内でも生徒から気軽にSCに話かける場面が見られるなど、生徒がSCを身近な存在と感じるようになったことがうかがえ、「環境づくり」の側面に対する効果が見られた。

3 平成25年度「不登校予防プログラム授業」の実施

多可町では、不登校児童生徒数が平成22年度以降減少傾向にあるものの、小学校では問題なく登校していた児童が、中学校に進学すると不登校に陥ってしまうケースが顕著に見られる。こうしたいわゆる中1ギャップによる不登校の解消に向けて、町内に1カ所設置された適応教室と連携しながら、町内全学校を挙げて不登校生徒の支援に継続的に取り組んでいるところである。そこで、平成25年度は、研究校の1年生を対象に「不登校予防プログラム授業」を行うこととした。

本授業は、研究校の八千代中学校を会場とし、多可町教育委員会と当所の共同研究実践発表大会に位置付けて実施した。大会当日は、多可町内の各小中学校の生徒指導担当者、不登校支援担当者に加えて、県内の不登校支援担当者、教育研究所関係者など50余名が参加した。公開授業の後、参加者を交えた意見交換を行った。

(1) 授業のねらい

授業のタイトルを「目指せ！ ほっこりクラス」とした。コミュニケーション能力の1つである「相手の気持ちを考えながら話を聞くことができる」という能力を高めることをねらいとした。授業のポイントは表3のとおりである。

表3 平成25年度「不登校予防プログラム授業」のポイント

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・否定的な聞き方「もやもや」と受容的な聞き方「ほっこり」の両方のロールプレイングを行うことによって、話し手の気持ちの変化を実感させる。・どうすれば「ほっこり」する聞き方になるかを生徒たちに協議させることによって、気持ちのよい聞き方の理解を深める。・「ほっこり」する聞き方で会話することによって、スムーズなコミュニケーションが図れ、気持ちよく生活できることを理解させる。 |
|--|

(2) 指導案

対 象		1 年 2 組	所要時間	5 0 分	
テーマ		目指せ！ ほっこりクラス		実施時期	平成25年 6 月17日(月) 5 校時
準備物		ワークシート、付箋、マジック、提示用カード			
学習活動			教師(T)・S C(S)の働きかけ		留意点
導 入	1 本時の目標を知り、学習の見通しをもつ。 (1)聞いてもらえない時の、相手の気持ちについて考える。 (2)コミュニケーションの際に「もやもや」がどのように生じるのかを考える。	T TS	S Cの紹介の後、好ましくない聞き方についてS Cとロールプレイングを行う。 「もやもや」の説明。ロールプレイングを見た生徒の感想を発表させ、黒板を使い整理する。		- S Cはあえて「もやもや」した気持ちを与えるような聞き方をする。 「もやもや」を感じさせる気持ちへの対処方法と、その気持ちはいつ、どのように生じるのかについて気付かせる。
	展 開 1	2 (1)否定的な聞き方を体験し、話し手、聞き手、観察者の気持ちの変化を知る。 (2)話し手、聞き手、観察者の役割を変えながら全員が体験するまで繰り返す。 3 グループワークをして、感想をワークシートに記入。班別に話し合った後、全体で「聞き方の工夫」について発表する。	S TS	実習の目的、手順、ルールを指示する。一つの班で実際にグループワークの流れを説明する。 机間指導をしながら、活動の様子に留意する。 	
展 開 2		4 (1)肯定的な聞き方から「もやもや」との違いについて考え、班で話し合う。 (2)「もやもや」との違いについて発表する。 5 (1)肯定的な聞き方を体験し、話し手、聞き手、観察者の気持ちの変化を知る。 (2)役割を変えながら、全員が体験するまで繰り返す。	TS S T TS	最初に行ったロールプレイングを、肯定的な聞き方で再度行う。 生徒が発表した意見を板書きし、聞く工夫について補足する。 気持ちの変化「ほっこり」について説明する。 机間指導をしながら、活動の様子に留意する。	
	ま と め	6 グループワークをした感想をワークシートに記入。班別に話し合った後、全体で聞く工夫の大切さについて発表する。 7 本時の学習を振り返り、感想を書く。	S	聞いてもらえない「もやもや」を改めて思い出し、聞いてもらえた「ほっこり」についてまとめる。 「居心地のよいクラスづくり」のために一人ひとりでできることについて説明する。	

(3) 授業の結果

ア 授業の様子

「否定的な聞き方」のロールプレイングの際は、話し手が寂しそうな表情を見せたり、声に元気がなくなってきたりする様子が見られたが、「肯定的な聞き方」では、いずれの班でも話し手、聞き手双方が楽しそうに会話を交わしている様子が見られた。「肯定的な聞き方」の工夫を話し合う場面では「相手の目を見ればいいよ」や「しっかり頷いてあげると聞いてもらってる感じがするんじゃないかな」など、どの班からも気持ちのよい聞き方として正しい方法が考え出されていた。

イ 授業を受けた生徒の感想

授業を受けた生徒から表 4 のような感想が出された。

表4 授業後の生徒の感想

- ・「もやもや」の時よりも「ほっこり」の時のほうが、教室内の空気が明るくなったように感じた。
- ・「もやもや」の時は、自分が一生懸命に話しているのに、全然聞いてくれている感じがなくてとても悲しかった。「ほっこり」の時には、みんな話を聞いてくれて、もっと話したいと思った。
- ・「ほっこり」した気持ちで相手の話を聞くと、友達が増えると思うので、これからは「ほっこり」で聞きたい。
- ・今日の授業で、相手が嫌な気持ちになるような聞き方をしていないか注意しようと思った。また、クラス内でも学年内でも「もやもや」した気持ちにならないようにしていきたいと思う。

ウ 参加者から出された意見

公開授業後、参加者を交えた意見交換が行われ、表5のような意見が出された。

表5 参加者からの意見

- ・今回のようなコミュニケーション能力を養う授業は、今後もっと必要になってくると思う。
- ・「聞き方の工夫」の授業はとても新鮮だった。クラスを居心地のよいものにするためにかなり有効な授業だと感じた。是非とも実践したい。
- ・今回のように、SCが子ども達と触れあう機会を増やすことで、子ども達と関係づくりを行い、子ども達がSCともっと気軽に話せるような環境づくりをすることが大切である。今回の「TT」は大変参考になった。

4 「不登校予防プログラム」実施による結果と考察

(1) 「アセス」の結果

不登校予防プログラムの効果を量的に測るために「アセス」を「不登校予防プログラム授業」の事前と事後に実施し、その平均値を比較した（図2）。「アセス」とは、いじめや不登校の予防等、児童生徒の学校適応支援を進めるために用いられる学校環境適応感を測る調査であり、「生活満足感」「対人的適応（教師サポート・友人サポート・向社会的スキル・非侵害的關係）」及び「学習的適応」の6因子から構成され、因子ごとの得点が高い程、それぞれの適応感が高いとされる⁵⁾。平成24年度は、「ストレスマネジメントスキルの向上」と「自己理解と他者への表現」の授業を実施した2年生において「アセス」を実施した。

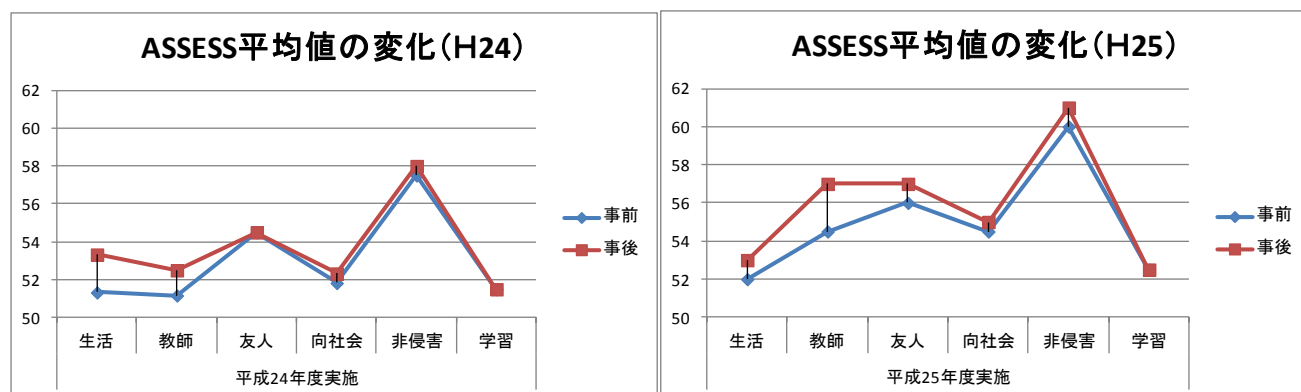


図2 事前と事後における「アセス」平均値の変化

その結果、「学習的適応」と「友人サポート」を除くすべての因子において平均値の上昇が見られた。特に「生活満足感」と「教師サポート」は+2.0ポイント、+1.3ポイントと大きく上昇が見られた。平成25年度は「聞き方の工夫」の授業を実施した1年生において同様に実施した。結果、「学習的適応」を除くすべての因子において平均値の上昇が見られた。平成24年度と同様に「生活満足感」「教師サポート」が大きく上昇したことに加えて、「友人サポート」「非侵害的關係」のどちらも+1.0ポイント上昇した。

(2) 教職員への聞き取り調査の結果

2年間にわたる不登校予防プログラムの効果について、研究校である八千代中学校の教職員に聞き取り調査を行った（表6）。

表6 教職員への聞き取り調査で出された主な意見

- 「不登校予防プログラム授業」による効果について
- ・「ストレスマネジメントスキルの向上」の授業後に、それまで行ってきた好ましくない「ストレス対処法」を、違う方法に変えてみようとする生徒も見られ、自分なりの対処法の幅が広がった。
 - ・「自己理解と他者への表現」の授業では、ＳＰトランプで自分自身のマイナス面をペアの生徒に話すことができ、ホッとした表情を見せる生徒がいた。
 - ・「聞き方の工夫」の授業実施後に、生徒同士で「ほっこり」という言葉を使うようになった。
 - ・このプログラムを始めて、生徒たちのコミュニケーションが穏やかになり、お互いの関係がよくなっていった。
 - ・この２年間における３つの授業の実施は、生徒相互の人間関係づくりに非常に役立った。
- 「環境づくり」による効果について
- ・それまでは相談に訪れることがためらわれがちだったが、このプログラム実施後には、ＳＣに気軽に話しかける生徒が増えた。
 - ・困った時の相談相手として、ＳＣを選ぶ生徒が増えた。
 - ・職員とＳＣとの距離も近付き、生徒のことで気軽に話ができるようになった。
 - ・学校、生徒の現状を把握している学校担当者と、広い視野をもった教育研修所とが連携し、共同で授業を作成し、支援委員会を定期的に行ったことにより、非常に充実した研究内容になった。
 - ・今回の取組を通信等で積極的に情報発信を行ったことで、大きな反響があり、保護者からのカウンセリングの申込もあった。

「不登校予防プログラム授業」に関する意見として、平成24年度では「ストレス対処法を変えてみようとする生徒が見られた」「自分自身のマイナス面を話せてホッとした表情を見せていた」、平成25年度では「ほっこりという言葉を使うようになった」など、それぞれ授業のねらいに即した変化が見られたことが多く語られた。また全体をとおしては「生徒たちのコミュニケーションが穏やかになった」などの意見があり、多くの教職員が不登校予防プログラムの効果を実感していた。

「環境づくり」に関する意見としては「それまで相談に訪れることがためらわれがちだったが、このプログラム実施後には、ＳＣに気軽に話しかける生徒が増えた」など、生徒にとってＳＣが身近な存在に変化したことが教師の実感として多く語られた。しかし平成25年度のＳＣ相談件数を見てみると、際だった変化は見られない(表7)。だが、相談者があった5月13日は、ＳＣと「ＴＴ」で実施したトライやる・

ウィークの事前学習の実施日、6月3日は「不登校予防プログラム授業」の事前模擬授業実施日であり、ＳＣが授業を行った日には相談に訪れる生徒がいることがわかる。更に「不登校予防プログラム授業」が実施された6月17日以降は生徒が相談に来ており、授業の実施とＳＣへの相談件数との関連がうかがえた。またその他に「職員とＳＣとの距離も近付き、生徒のことで気軽に話ができるようになった」と教職員との関係も近くなったとの意見も多くあった。

図3は平成24年度の教職員のＳＣ相談人数の月別推移である。プログラム実施以前と比較して、実施後は、1日の平均相談人数が約1.5倍に増加していた。

(3) 不登校生徒数等の推移

表8のように、研究校の不登校生徒数は、実施以前である平成23年度と比較して、平成24年度及び平成

表7 ＳＣへの相談人数（生徒）

日 時	相談人数
4月	15日 0
	22日 0
5月	8日 0
	13日 2
	20日 0
6月	27日 0
	3日 4
	10日 0
	17日 0
7月	24日 1
	1日 2

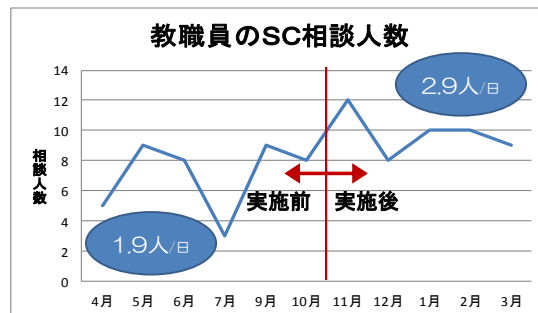


図3 ＳＣへの相談人数（教師）の月別推移

25年度は共に2名減少している。また、不登校生徒1人当たりの年間欠席率は平成23年度の68.6%から平成25年度の54.9%へ年々減少している。これらのことから、不登校生徒数が増加していないだけでなく、不登校生徒が出席できる日が増えてきているということがうかがえる。さらに、1年生で新たに不登校になった生徒数を見てみると平成25年度では0となっている。中1ギャップによる不登校の解消を目的に1年生を対象に「不登校予防プログラム授業」

を行った成果だと考えられるだろう。

(4) 考察

ア 授業づくりについて

平成24年度においては、ストレスマネジメントスキルの向上をねらいとした「ご機嫌に過ごすための工夫」で「イライラした時」や「落ち込んだ時」の心と体の変化を学び、対処のしかたを友人と共有することによって、ストレスに関する正しい知識や、適切に対処できるという効力感が得られたと思われる。これによって、学校生活における様々なストレスへの不安や悩みが和らぐきっかけとなったのではないだろうか。自己理解と他者への表現をねらいとした「SPトランプを用いた他者との関係づくり」では、SPトランプを用いて自分と相手の性格の傾向をお互いに見つめ合う体験によって、客観的な視点から自分を分析し、あるいは他者の内なる部分を再発見することができ、内面的な繋がりが深まったものと思われる。自分の性格や特性を再認識したり、またそれをクラスの友人とお互いに話せたことによって、自他を尊重する気持ちに変化が生まれたのではないだろうか。この2つの授業によって学校生活への不安が和らいだことが、「アセス」の「生活満足感」に数値の上昇となって表れたと思われる。

平成25年度においては、「聞き方の工夫」をねらいとした「目指せ！ほっこりクラス」で、聞き方のトレーニングである傾聴訓練を友人とともに行ったことによって、友人との付き合い方において不可欠である「相手の気持ちをくみ取る」大切さについて体験をもとに実感できたのではないだろうか。これによって、コミュニケーションに対する不安が和らいだことが「アセス」の「友人サポート」の数値の上昇となって表れたと思われる。

しかし、これらの結果は「不登校予防プログラム授業」の実施のみによるものではないと考える。「生徒同士で『ほっこり』という言葉を使うようになった」という感想にあるように、授業で学んだことを日常へ取り込めるように日頃から教職員が働きかけることが重要ではないだろうか。うまく日常に取り込めたことで「居心地のよいクラス」に向けた態度に変化が表れたものとする。

イ 環境づくりについて

「不登校予防プログラム授業」は、教師とSCとの「TT」で実施した。これまで授業では出会うことのなかったSCが教師とともに教壇に立ち、更には、そこで自分の心を素材として学ぶという経験は、生徒にとってとても新鮮であったと思われる。その結果、SCを身近な存在とすることができ、気軽に相談できる生徒が増えたのではないだろうか。また、月に1度の支援委員会において、SCを交えて取組内容の協議を行ったり、SCと協働でプログラムを実施したりしたことによって、教職員がSCとより効果的な連携を図ることができるようになったと考えられる。

5 不登校予防プログラムの提案

今回の成果は、「SCと協働」で「学校全体として取組」を行い、「心の専門家によるサポート」を得ながら進めたことなど、様々な取組の相互作用によるものだと考えられる。また、これらの取組を行うことによって、生徒だけでなく、教職員自身が変化したことも大きな要因だと考えられる。従って不登校の未然防止の取組は、実生活に即した「不登校予防プログラム授業」を計画的に行っていくこと、SCが学校づくりに参加すること等によって児童生徒、教師、SC、保護者がお互いに「支え合える環境づくり」を進めていくことが重要であるとする。以上より、不登校予防プログラムを次のように提案する（表9）。

表8 不登校生徒数等の推移

	H23	H24	H25
不登校生徒数	X _(人)	X-2 _(人)	X-2 _(人)
不登校生徒1人あたりの年間欠席率	68.6(%)	58.5(%)	54.9(%)
1年生で新たに不登校になった生徒数	Y _(人)	Y _(人)	0 _(人)

※「X」「Y」は平成23年度の人数を表している。

表9 不登校予防プログラム

＜不登校予防プログラム＞						
「不登校予防プログラム授業」の実施	取組内容		内面の変化	態度の変化	期待される効果	不登校の未然防止と適切な対応
	活動	授業例※				
	めめせる ンル 活トフ 動カマ をネ 高ジ	「ストレスマネジメント（毎日をご機嫌に過ごすための工夫）」 「自分の感情を理解する」 「怒りのメカニズムを理解する」 「頭にきたときのよりよい対応」 「10秒呼吸法を使ったストレスマネジメント」 「おおらかな心をもとう」	ストレス対処能力の向上 セルフコントロール能力の向上	適切なストレス対処 冷静な対応 暴力等の軽減	クラスへの安心感 居心地のよいクラスへ	
	動をる自 理活己 解動を す・理 る他解 活者す	「自分の本」 「私は私が好きです。なぜなら・・・」 「友だちの良いところ探し」 「あったか言葉」 「役割交換でがみ」 「SPトランプを用いた他者との関係づくり」	自己理解の高まり 他者理解の高まり 自己肯定感の高まり	前向きな学校生活 個性を認め合う態度	自分への肯定感 よりよい友人関係 居場所の確立 公共性の向上	
支え合える「環境づくり」	高シコ めヨミ るンユ 活能ニ 動カケ を！	「自らの課題や問題を解決する」 「様々な自己表現を知ろう」 「うまく仲間に入ろう」 「NASAゲーム」 「言語による伝達」 「目指せ！ほっこりクラス」	相手のことを考える力の向上 思いを表現する力の向上 コミュニケーション能力の向上	円滑なコミュニケーション 思いの表現		支え合える環境へ
	取組内容		意識の変化	行動の変化	環境の変化	
	(1) SCが授業へ参加する ・「不登校予防プログラム授業」の協同計画、協同実施 ・学活や道徳、行事の事前学習等での「TT」 (2) 心に関する情報発信 ・全校及び学年集会等でのSCによる講話 ・相談室通信等の発行 (3) SCが関係会議へ参加 ・生徒指導部会、教育相談部会、不登校支援委員会等 (4) 不登校支援委員会の実施 ・校長、教頭、担当教諭、該当担任、SC、外部の専門家等の参加 ・月に1回程度の定例会議でアセスメントと組織的取組の方針を協議		児童生徒 SCへの親密感の高まり 学校の安心感の高まり	SCへ相談 教師へ相談	相談環境の改善 保護者の安心感	支え合える環境へ
			教保護者 SCへの親密感の高まり 専門的な知見への関心の高まり	SCへの相談の奨励 SCと協働による活動 専門的な知見を活かした関わり	専門的な知見の応用 組織的な対応 適切な登校支援	

※各授業の指導案は心の教育総合センターWebページ（<http://www.hyogo-c.ed.jp/~kenshusho/07kokoro/h23/kokoronokenkou.pdf>）及び当所研究紀要第123号に掲載

6 おわりに

今回行った授業の基となっている「心の健康教育プログラム」の指導案は、当所の心の教育総合センターのWebページからダウンロードが可能となっている。この不登校予防プログラムが様々な学校で実施され、不登校の未然防止に役立つことを心より願っている。最後に、本研究に御協力いただいた多可町立八千代中学校及び共同で研究を行った多可町教育委員会の皆様に心より謝意を表する。

注)

- 1) 文部科学省『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』, 2013
- 2) 文部科学省『不登校への対応について』, 2003
- 3) 兵庫県教育委員会『平成24年度兵庫県下の公立学校児童生徒の問題行動等の状況について』, 2011
- 4) 兵庫県立教育研修所 心の教育総合センター『心の健康教育プログラム』, 2012
- 5) 栗原慎二・井上弥『アセスの使い方・活かし方』, ほんの森出版, 2011

＜参考文献＞

- ・ 畠瀬稔他『人間中心の教育』, 星雲社, 2012
- ・ 八尾芳樹『人間力を高める！セルフ・エンパワーメント』, 東京図書出版, 2007
- ・ 吉澤克彦他『エンカウンター・エクササイズ12か月 中学校』, 明治図書, 2011
- ・ 富永良喜『ストレスマネジメント教育』, 北大路書房, 2000
- ・ 國分康孝『エンカウンターで不登校対応が変わる』, 図書文化, 2010

本研究は、「財団法人教育研究振興会『教育の喫緊の課題に対応した研究助成』」の支弁を受けた。